

古事記の政治的世界観

松尾庄一

はじめに

天皇は神でなく人であるとの「人間宣言」を読んだときに、戦後教育を受けた身として「当たり前前のことを仰々しく取り上げたのはなぜだろう」と不思議に思った。加えて「それでは天皇に神格性が与えられたのはなぜか」という疑問が生じた。これに答えてくれたのが「古事記の世界」（川副武胤著 教育社歴史新書日本史9）である。これによると、実質的な編集者である天武天皇と周辺者たちの周到な論理構成の作業があり、その成果を神話という形にして後世に残したのが古事記である。同じ神話を扱っていても日本書紀は歴史書として汎用性を持たせるためイデオロギー的要素をできるだけ抜こうとし、一方、イデオロギーを伝えたい古事記は秘伝として扱う意図があり、限られた範囲にしか広まらなかった。

以下、同書の内容に沿って、古事記の政治的世界観について、構成、目的、意義に分けて紹介する。なお、文責はすべて筆者にあることを念のためにお断りしておく。

第1 古事記の構成

1 神世巻

神世巻は時系列的に天地開闢、イザナギ・イザナミによる国生み、高天原の物語、オオクニヌシ（オオナムチ）による国づくりの構成になっている。

国づくりについては、オオクニヌシがスクナヒコの協力で国の土台の構築（国を作り堅めること）を終えた後、オオモノヌシの後援で国の内容の充実（国を作り成すこと）に取り掛かったところで終わる（なお、オオクニヌシらの活躍を「国を作り堅める」と「国を作り成す」ことに分けて記述したことが本書の秀逸な点の一つである。）。

突然場面が変わるのは、オオクニヌシらが国の土台を固めたのを見たアマテラスら高天原系の神がその子孫を天降らせてオオクニヌシらから国を譲らせたからである。国として形が出来たところで、アマテラスが当たり前のように支配者を送りこむのはなぜかという疑問が生じるが、これについて神野志隆光氏は、「アマテラスが高天原の主宰神で、かつ、高天原一葦原中国（古代日本のこと）を貫く秩序をになう存在だから葦原中国の支配者を決定でき、自分の孫神にあたるニニギを支配者として降した。」とする（「古事記と日本書紀―「天皇神話」の歴史」講談社現代新書）。天皇家による支配の正統性を天孫降臨の物語で認証しようとしたのであろう。また、国の平定に当たって、オオクニヌシに仮託されるそれまでの支配者との間に血なまぐさい争いがあったことは想像に難くないが、古事記ではオオクニヌシらを「言向けた」（服従すると言わせること）と表現している。これは、後述のように「政治

には平和が根幹にあるべきだ」という古代大和朝廷の政治観の表れとも思われる。

また、円滑な国譲りの背景としてスサノオを通じてオオクニヌシを高天原に血統的に連ねるという仕掛けを置いている。なお、オオクニヌシらの国づくりは日本書紀ではほとんど触れられず、天皇家の祖先がいきなり天降る構成になっている。この点、古事記の日本発展の説明の方が説得力では勝っていると思われる。

2 歴代天皇巻

こうして神世巻は終わり、天皇統治の嚆矢である神武東征で始まる歴代天皇巻になる。歴代天皇巻でも多くの超人格的霊格を持った神々が然るべき役割を持って登場する。

前半では主宰者は神であり、天皇は神に擁護されるということで天皇統治を正統化している。しかも、外延的発展（そのための手段が戦争である。）の主宰者はアマテラス、内包的発展のうち、経済の主宰者はオオモノヌシ、政治の主宰者はオオクニヌシという具合に役割分担している。

アマテラスは天皇や天皇家の危機に現れてそれらを救う形で天皇を擁護する。一方、オオモノヌシやオオクニヌシは祀るといった約束を守らなかったために祟るという形で天皇統治に影響を与える。彼らの具体的役割は次のとおりである。

崇神期に疫病による大量死というオオモノヌシの祟りがあった。崇神天皇は夢見でのオオモノヌシの託宣に従い、オオタタネコを神主として三輪山にオオモノヌシを祀ると祟りは治まった。崇神天皇は天下が太平になったのを待って人民に課税した。国家の成長発展に不可欠な課税等の経済を正統化するものがオオモノヌシであった。

崇神天皇の子垂仁天皇の子ホムチワケ（天皇に準じて御子と呼ばれた。）はオオクニヌシの祟りで生まれつき口がきけなかった。天皇の夢見にオオクニヌシが出て、「わが宮を皇居のように造営すれば口がきけるようになる」と託宣した。垂仁天皇の夢にオオクニヌシが示現したのである。これは垂仁期に作られた「部（べ）」や「坐（え）」という国家組織に神霊性を与えるために、縁起として神の示現を語ったものである。なお、ホムチワケを天皇に準ずる存在にしたのは託宣の重さに比例させるためである。国家の成長発展に不可欠な国家組織の設定等の政治を正統化するものがオオクニヌシであった。

第2 古事記の目的

1 天皇神格化の認証

それまでは神の擁護下にあることにのみ権威を輝かし得た天皇が、雄略巻では神と出会ったこと（雄略天皇のヒトコトヌシとの葛城山中での出会い）で現人神として自ら絶対的権威をもつことができるようになったとの記述がある。天皇と全相似の外観、言葉及び態度をもったうつしみの神（ヒトコトヌシ）を出現させ、それによって現人神の絶対的権威が天皇に存することを認証したのである。

この物語は、大和朝廷が実質的に雄略天皇から始まることを暗示している。しかも、この認証を雄略巻で突然語るのではなく、曾祖父に当たる応神天皇に対してイザサワケ（気比神

社の大神)が「名を交換」する提案を行った物語を天皇神格化の伏線として配置している。

2 国家発展の明示

古事記では、大和朝廷の勢力の外延的発展が配列の整合性・網羅性をもって描かれている。日本各地のまつろわぬ神(実態は各地の豪族)を平定し、ついには朝鮮半島までその支配を広げたことが、一つひとつの出来事を各天皇の事績として取り上げることで大和朝廷が同心円的に発展したことが分かるようになっている。

また、国が発展するには経済の発展やまつりごとをなす構造(政治組織・国家組織(制度))の構築が不可欠である。これらの内包的発展について古事記では、池や用水路(溝)の灌漑施設や屯倉(三宅・直轄農場)の公的営造物の設置、及び、調の賦課、課税(課役)の猶予等貢納に関する事など、経済や政治組織に関する事項の起源が時代(主宰する天皇)を違えて一回性の原則でとりあげられ、読み終わると全体像が明らかになるようになっている。

これらは国家発展のプロセスを明らかにしている。しかも、単に事実を羅列するのではなく、アマテラスが神功皇后の新羅服属、ヤマトタケルの国内征服等の戦争のときに現れ、オオクニヌシとオオモノヌシが疫病の流行等政治の危機に示現することなどで、神が国家的発展のプロセスを回す大きな役割を果たしたことを明らかにし、また、国家発展の正統性を認証している。

これらの記述は、どのような歴史的事実を背景にしているのだろうか。網野善彦氏によると次のとおりである。(「日本社会の歴史(上)」岩波新書)

雄略天皇らいわゆる倭の五王の時代になると、天皇家自ら、大伴氏、物部氏ら有力豪族らが保有する強大な武力(伴とよばれる服属集団と半島からの鉄製武器等)で近畿周辺の吉備氏ら有力豪族を次々と征服し、ミツギ(貢納)・贈与を中心とした支配服属関係、屯倉(大和朝廷の直轄地)等の支配・監視体制を整備していった。被征服者を含めて有力豪族らは伴造(とものみやつこ)と呼ばれ、その後も大和朝廷に奉仕し、その勢力範囲を拡大していった。

第3 古事記の意義

古事記の政治的意義について、以上述べた構成と目的に基づき本書の主張を発展させた考察を試みたい。

1 天皇統治の正統化

古事記では、神はつねに天皇の存在理由(レゾン・デートル)であり、神の存在に裏付けられることで天皇の権威は正統化された。天皇の資格条件はアマテラスの子孫であると同時にアマテラスの霊威を受け継いだ日御子であることとされた。始祖の霊威(天皇霊)を受け継ぐことができる者であれば、先代の天皇の長子でなくても天皇の地位に就くことができた。その意味で男系長子相続は後世の産物である。また、祖先神の強力な霊威を受け継ぐには天皇は様々なタブーによって緊縛される必要があった。

網野氏によると、このような天皇の神格化で決定的な役割を果たしたのは天武天皇である。

壬申の乱で奇跡的な勝利をおさめた天武天皇は神として周辺から崇め奉られ、自らもあきつかみ（現御神）と称した。政治的にも天皇親裁を実践したが、宗教的にも壬申の乱で大きな加護を得たアマテラスを祀る伊勢神宮を天皇家の氏神社とし、皇女の一人を斎王として派遣した。このような天皇自身やその周辺者の思いが、天皇の権威と支配の正統性は神々の時代から約束されたことであるとする神話を古事記や日本書紀としてまとめる原動力になった。

2 統治構造の正統化

天武朝のころに集権的な国制への発展が試みられた。そのためには、政治の中枢は世襲ではなく、能力ある個人によりなされること、人民を領域によって組織するという変革が必要であった。一方で、血縁を紐帯とする氏族制的な社会組織や社会原理が春秋戦国時代に解体に向かった中国社会と違って生き続け、「部（べ）」は世襲制と縦割りを原理として伴造、国造らの豪族によって私物化される傾向があった。

中央集権制と氏族制とを調和させるため、この世の出来事は円環のように永遠に繰り返すはずだという循環的な時間意識の下、天皇に奉仕する豪族は、古事記等の物語で自分達の始祖が天皇の祖先神に仕えたように律令制の中で自分達も永遠に天皇に藩屏として仕え奉るという日本風の統治構造を作った。

なお、天皇に身近に仕えている豪族は、ニニギとともに自らの祖先神であるアメノコヤなどの5神らがともに降ったという古事記の記述によりこの循環構造を確信した。

3 日本のアイデンティティの確認

日本書紀ほどではないが、古事記は、日本のアイデンティティ（国の姿）を成り立ちから確信するための物語である。また、古事記は、遣唐使を派遣せず、新羅との積極的交流を推進したことなどに表されているように、中国（唐）に対する反発や超越意欲からなる天武朝の文化革命の産物であり、今でいうナショナリズムの萌芽を感じさせる。

確信しようとするアイデンティティとは、上述の脱中国の意図からもわかるように、端的に言えば大国としての日本であった。大国といっても実態は中国に準じるミニ帝国に過ぎず、また、夜郎自大と言ってしまうとそれまでだが、一連の物語が日本のアイデンティティを当時の人びとに確信させた。

大国志向は国外への進出につながるが、著者によると、外国（又は非支配地域）との戦争に関する記述では、国内の謀反の制定等では使われない、ことむけ（言向）、やわす（和す、平す）の語が使われている。なお、神功皇后の新羅服属ではこれらの語も使わず、軍艦の船団による大波が新羅の国に押しあがったために新羅国王が和を講うた、ということになっている。以上は、戦闘等の血なまぐさい出来事があっても平和が外交や国際関係の基本であるべきだということを暗に示していると解釈される。

おわりに

古事記の政治的世界観は以上のようなものだったが、時代を追って意味を付け加えられ、

また、更新されて生き続けた。江戸時代には本居宣長により、日本の民族的、文化的根拠が古事記に見出された。

天皇制に関して言えば、天皇が権力の絶対的行使者として君臨できたのは律令体制の前期のみであり、その後は周知のように摂関制、院政、幕府制によって天皇は権力の行使者ではなく、時々の権力者の権威の源泉として位置づけられるようになった。

これに古事記を基にして変化のきっかけを与えたのは本居宣長であるが、彼も天皇の正統性の根拠ではなく、天皇とともにある社会の秩序の根拠として古事記を取り上げた。そして、この理論を実践に移したのが明治維新である。明治維新は、王政復古の大号令、神祇官の太政官に対する優越、廃仏毀釈など宗教的な天皇主義で始まり、西欧の文明、文化を取り入れた後、明治憲法として結実した。この憲法も万系一世で不可侵の天皇に広範な大権を与えるという欧米諸国にはない特異なものであった。これが昭和期に至り、天皇中心の軍国主義（皇国主義）として国民の一体性を確信させるものになり、結果として大変な惨禍をもたらしたのは承知のとおりである。戦後、マッカーサーとの会見、「人間宣言」のステップを経て現憲法で象徴天皇制が確立した。

ところで、よく読むと「人間宣言」で否定しているのは天皇の地位の根源としての神話であり、日本のアイデンティティ確認や統治の正統化の手段としての神話ではない。古事記はこれまで述べたようにわが国の成り立ちや発展を神話という形で表しており、盲目的に受け入れることはないが、安易にすべてを否定せずに客観的に読むことで、日本のアイデンティティなどについて歴史の事実を反映した編集者達の深い思いを本書は再認識させてくれる。